

平成28年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 槻田 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語, 数学)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 数学)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 数学A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		数学A		数学B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	24.3	74	5.8	64	21.2	59	6.1	41
全国	25.0	76	6.0	67	22.4	62	6.6	44

(2) 本校の学力調査結果の分析

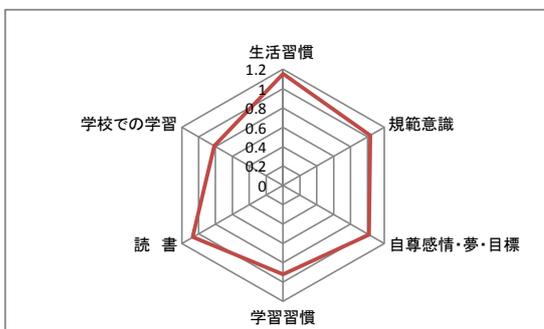
国語A	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均を上回っているが、言語についての知識・理解・技能の正答率が下回っている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	2二 文脈の中における語句の意味を理解する問題がよくできていた。	
	努力が必要な問題	9六 文字の形や大きさ、配列に注意して書く問題の正答率が低かった。	

国語B	全体的な傾向や特徴など	全国平均を下回っており、書く能力の観点から平均を大幅に下回っている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	1二 目的に応じて必要な情報を読み取る問題がよくできていた。	
	努力が必要な問題	2三 課題を決め、それに応じた情報の収集法を考える問題の正答率が低かった。	

数学A	全体的な傾向や特徴など	全体的に上回っているが、図形・関数領域では、全国平均を少し下回っている。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	1(1) 分数と小数の乗法の計算は、全国平均よりも正答率が高かった。 7(2) 菱形の対角線が直角に交わることを、記号を用いて表すことも、全国平均よりも正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	2(3) 不等式の意味を読み取る問題が、全国平均よりも正答率が低かった。 6(1) 平行線や角の性質を用いる問題も、全国平均よりも正答率が低かった。	

数学B	全体的な傾向や特徴など	全体的に上回っているが、図形・関数領域では、全国平均を下回っていた。図形の証明では、無回答率が全国平均を上回っており、難しい問題に取り組むという姿勢が余り見られなかった。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	1(3) 適切な事柄を判断し、その事柄が成り立つ理由を数学的な表現を用いて説明する問題は、全国平均よりも正答率が高かった。 5(1) 資料の蛍光的に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する問題は、全国平均よりも正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	3(2) グラフの傾きを事象に即して解釈する問題が、全国平均よりも正答率が低かった。 4(2) 付加された条件の下で、新たな事柄を見だし説明する問題も、全国平均よりも正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
「学校での学習」の項目が、全国平均よりかなり低い。これは、授業で、「話し合い活動」や情報分析、研究発表などの活動が余り行われていないからであろう。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ○ 「話し合い活動」や「情報収集・活用」等の思考力を伸ばす授業の工夫。 ○ 自ら学ぶ姿勢を伸ばす授業の創造。

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ○ スマホやゲームの使用時間を一定時間に抑えるための家庭との連携。 ○ 家庭学習の定着を図るための、授業ノートの改善。
--